



## 会員の声



### 巣ごもりの中のつぶやき

澤井 雅春

10月より高齢者インフルエンザ予防接種の受付が始まった。早速病院へ行き接種してきた。通常の患者に加え接種者の多いこと。皆体調管理に気を付けている様子だった。

立山に棲むという霊獣「クタベ」が疫病を退散させると話題になっている。描かれた姿を見れば病の難を逃れられるとされる刷り物が脚光を浴びているのである。しかし、それを見てか3月初めの北日本新聞の川柳広告に「コロナには立山神話通じません」と載っていた。人間には、危機に面しても「自分だけは大丈夫」と考える働きがあるのだろう。続いて「我が嫁も適度な距離を取り始め」とあった。コロナ感染予防は、不要不急の外出を避け、マスク・うがい・手洗いの励行・3密を避けるのが当たり前になった。そして正しく恐れれば怖くない。

今年は、インフルエンザ感染者が少なく共通の抑止効果もあるそうだ。

コロナ禍は平穏な日々の有難さを教えてくれたが、日常が日常でない生活になって、平凡な生活がいかに大事かとしみじみ思う今日この頃である。コロナとの付き合いは早く収束して欲しいが長期戦になるだろうか。

### ぶらり名水探訪の旅「郡上八幡」

横内 一浩

コロナ禍。ソーシャルディスタンス、3密防止、マスク着用と騒がしい限り。気分転換に\*総ぶら（連れは徘徊と言う）と意気込めば、周りはマスク美人ばかりと面白くも可笑しくもない。文豪漱石先生は住みにくさが高じると・・・詩が生まれ絵が出来ると語る。しかし富山のみやあらくもんには到底無理。そこで思いついたのが、名水。そうだ！名水を飲みに行こう。

10月吉日国道41号線南下、神岡、古川、高山から紅葉真っ盛りのせせらぎ街道を抜けると、踊りと水の町「郡上八幡」に到着。観光駐車場から徒歩3分の元祖肉桂玉（ニッキ飴）の桜間見屋（おうまみや）の路地を抜けると、清流吉田川のほとりの宗祇水（そうぎすい）。名水百選の一番に選ばれた宗祇水は「白雲水」とも呼ばれている。祠から湧き出る水は飲み水・米洗い・野菜洗い・桶漬け場と分かれている。但しコロナ禍、飲用のひしゃくはなく、「生地」の湧水のように流れてもいない。仕方ないので持参のキャップで理事長口癖？の自己責任と唱えながら一口ごくりごくり、まるやかな甘さの味わいに納得しながら満足半分。

それではと孤独のグルメを真似して…腹が減った(^\_^)。食いしん坊のみやあらくもんは郡上鮎と飛騨牛ステーキ。「郡上八幡出るときは雨も降らぬのに袖絞る」郡上踊り川崎の一節だが、袖絞らず財布の紐絞って無事帰路に着きました。

\*総ぶら（総曲輪廻りを行ったり来たり、ときには城址公園から松川・いたち川を歩き石倉地蔵尊の名水を訪ねること）

### コロナ禍のなかでの水 理事長 青木 正樹

今年に入り中国武漢で発生した新型コロナウイルスが日本にも入り込み、未だ流行の収束は見えていないのが現状です。来年半ばにはワクチンを国民全員に無料接種するとの施策が取られようとしています。各国で開発中のワクチンは副作用がまだ不確定であり紆余曲折がこれからも予想されます。また完全な特効薬も開発が出来ていない状況でもあり、そういった中では私たち一人ひとりが普段から日常生活をする上で衛生管理に注意していくことが非常に大事になってきます。外出時のマスクは当然のこと 手洗いやうがい・アルコールによる消毒などを含めて各個人が自己防衛をしていって欲しいです。またソーシャルディスタンスを取ることも忘れずに行動してください。

こういった新型コロナの流行もですが、インフルエンザも冬には流行します。また、問題として挙げられるのは、水道水がコロナウイルスに汚染して危険であるとの一部の業者などによる悪質な偽情報が出回っていることです。各自治体のホームページにも出ていますが、水道水は最も厳しく管理され塩素によって殺菌消毒された水であることを知っておいてください。今、このウイルスによるパンデミックの状況にあるときこそ管理された水道水を飲んでいただきたいと思います。名水の会であれば湧水をと勧めたいところですが、浅井戸などは動物の排泄物等の影響をもろに受け大腸菌に汚染される確率は非常に高く、いつも飲用可能とは限りません。各湧水で「生水は自己責任で」と書いてある所以です。湧水でも滅殺菌装置等が設置されているところもありますが、長期保存できるとの話は半分にして湧水は煮沸して使ってください。水道水は危険との業者のうまい口車には乗らないこと。不要な高い買い物をするだけです。アルカリイオン水がコロナを殺菌するとかの話も世間に出ているようですが、アルカリイオン水は胃酸を中和し胃には健康的かもしれませんが、コロナウイルスは殺せません。出来ていれば皆さん飲んでます。疑似科学と言われる怪しい話には眉に唾をつけて乗らないようにしてくださいね。

話は変わり、昔は疫病が流行った時は、御霊（みりょう）、怨みを持って死んだ者の祟りであると恐れたものです。これを鎮めて都の外に霊を出すことを目的に京の町では祭りが執り行われました。かつては河川の氾濫の後に疫病の流行があり、人々は河川・水に対する畏怖の念を抱いていました。春から夏にかけて展開する京の祭りは水への祈りや願いが随所に見受けられます。御霊は川から難波の海に流されたとされます。代表的な祭・祇園祭もこの御霊会に由来し、古くから人々は水への畏敬の念を持って暮らしていたようです。私達も水に感謝し生活していきたいものです。